

中嶋 今日お招きしたカダールさん御夫妻をはじめ、フランスの現代中国専門家を紹介する機会が、日本ではこれまであまりありませんでした。本日はいいチャンスに恵まれたと思います。

カダール 私たちも中嶋さんとの討論を楽しみにして参りました。

中嶋 今日は久しぶりに大いに議論したいのですが、やはり最初は中国のベトナム侵略からとり上げざるを得ないでしょう。

## 知識人にとっての 「中国とベトナム」

中国のベトナム侵略は、日本の知識層の一部に大きなジレンマをもたらしました。彼らは文化大革命に刺激され、次いでアメリカのベトナム侵略への反対運動を展開し、一九六八年のバリ五月革命によっても奮起させられた。その結果が文革の挫折そして今回はまた思いもかけない中国の侵略になったわけですから、こうした一連の事態の影響はかなり深刻です。

カダール フランスの知識人にとっても状



なか じま みね お  
中嶋 嶺 雄

(東京外国語大学教授・現代中国学)

C・カダール

(フランス国立政治科学財団  
国際研究調査センター)

況はまったく同じです。そこで、中国の侵略については、言っておきたいことが二つあります。第一はこの決定が、今日の現代化政策の必要性をどのように考慮した上で下されたものだろうか、ということです。侵略の決断は鄧小平自身が、他の指導者たちの賛同を得て下したのでしょうが、この戦争を早く終結させなければ、彼らが日本やアメリカ、西欧諸国の協力を得て進めるはずだった経済の発展を害うことは間違いありません。

第二には華国鋒、汪東興といった人たちがこの決定にいったいどの程度関与したのか、ということですが。私の考えでは、彼らの背後には、昨年の秋以降の中国内部で起った変化に面従腹背で従った中堅官僚たちがいる。鄧小平はこの一派にたいして勝利を得るために、しばしば政治上の譲歩をせざるを得なかった。その譲歩の一つがブノンベン陥落で失った中国の民族的威信の回復だったのでしょう。

### 「四・五運動」の意味

程 この戦争は中国内部の変化の経済的側面だけでなく、政治的民主化のプロセスにも

抵抗運動」という地下組織に参加。ここでバクチアル氏（シャー体制最後の首相となつた）と知り合い、共に民族運動に身を投ずる。

同組織は、ハッサン・ナジ氏（現在、テヘラン宗教勢力のリーダー）の率いる政治結社と結びつき、一九六〇年七月、モサデク系の民族戦線の活動復活にこぎつけるが、その後一年足らずでバザルガンは民族戦線を去る。

一九六一年五月、アヤトラ・タレガニ師（進歩的なアヤトラとして知られる）、ハッサン・ナジ氏、ヤドラ・サハビ地質学教授などと、「イラン自由運動（MLI）」を組織。「イラン自由運動」は、イスラム教が現代社会の要望に応えることのできる政治的宗教であると唱えて、学生、教授、医者、技術者などを含む多くの社会階層の支持を得て、数年後にはイランで最も強力な政治運動に発展するが、やがて活動停止の憂目に会う。

MLIの禁止に伴い、技師を中心とする旧MLIの同志は、「ムジャヒディーン」（人民闘争組織）と呼ばれる都市や農村におけるゲリラ活動の組織をつくる。

こうした反体制運動のために、バザルガン氏は前後四回投獄されている。この間、氏

は、「イラン自由・人権擁護協会」を設立現在に至るまで、政治犯の人権擁護に携わっている。こうした政治活動のかたわら世に問うた著書、大小論文の類は、百編にのぼるといふ。宗教、政治、科学を主題としたものがほとんどで、主要な著作に、「人間熱力学」「インド解放」「マルクス主義は科学的か」「復活とイデオロギー」などがある。「復活とイデオロギー」は特にイスラム政府を主題にとり上げており、イスラム共和国構想の思想的裏付けを与えているという。

これまでイラン国民は、シャー（国王）の追放、シャー体制の打倒を目ざすという点で一致し、共通の目標に向って反体制各派の主義主張の違いを乗り越え、一心同体となって闘ってきた。その目標が達成された今、当然の成行きとして、国家統治のあり方をめぐって各勢力の間に主張の隔たりが浮び上ってきた。対立は、宗教勢力対非宗教左翼勢力という大きな対立に加えて、左翼勢力内にムジャヒディーン、フェダイーン、トゥーデ党（マルクス主義を標榜する最も過激な左翼）など、二十を数える組織があり、複雑を極めるが、いずれも現実を無視した急激な改革を唱

える点で共通して、バザルガン政権の穩健で民主的なやり方とは相入れない。

バザルガン政権の主な支持母体は依然として、イスラム教勢力である。しかしこのイスラム教勢力は直接ホメイニ師の指導力で結びつき、ホメイニ革命委員会を構成して、暫定政府を飛び越え、政治の実権を行使するに及んでいる。革命委員会は先頃、暫定政府にはからずし軍隊の幹部を逮捕、処刑した。同じく旧体制に関係した人物の処刑は相継いでいる。これらの処刑はラジオで聞くまで知らなかったと、バザルガン首相は遺憾を表明している。さらに、革命委員会の支配下にあるイスラム革命法廷は、政治犯以外の処刑にも乗り出し、盗み、暴行、姦淫などの道徳罪に対して、コーランの教えに従った公開刑を復活させている。

こうした中で、三月三十日には革命政府の是非を問う国民投票が行なわれる予定である。ホメイニ師のイスラム共和国は果して国民の支持を得ることができであろうか。いずれにしても、イランの政治に理性が勝利を収めるまでにはまだ長い時間がかかりそうである。（中東経済研究所・研究副主幹）

らない。ボル・ポト体制は周知のようにコミューン国家、あるいは「兵營國家」であつて、「四人組」との關係は密接でした。

私が強調したいのは、現代化政策自身が内的に困難の多いものであるために、その点からすれば中国は安定した国際環境を必要としていたということです。中国をめぐる国際環境からいって、中国がベトナムを侵略すれば、それはソ連が中国問題あるいはアジア問題により容易に介入することを許すことは明白でした。

程 その通りだと思ひます。鄧小平の本心は分らないけれども、毛沢東時代からの中国のカンボジア政策を、彼は変える意図も可能性もないように私には見えませんでしたね。ベトナムがカンボジアに侵攻したとき、鄧小平にとつてはボル・ポトを切るには遅すぎたのです。

ボル・ポト体制の急激な崩壊についての分析が、北京には欠けていたように思われる。ベトナムの帝国主義非難といった表面的なことではなく、政治的・外交的政策との関連を考慮して、それより以前の時点から中越戦争を回避する方向に調整すべきだった。残念ながらそうならなかったのは、中国の誤算だと思

います。

カダール 中国はカンボジア問題で面子を失つたという。それならばボル・ポトを支持した時からそれは始まっていたんです。「四・五運動」のプレッシャーがもつと強かったならば、鄧小平は毛のカンボジア政策を公に批判することもでき、ボル・ポトとの關係を切斷することができたでしょう。そうすれば、ベトナムにカンボジア侵攻の口実を与えることは少なくともなかった。

あなたもおそらく同意見だと思ひますが、鄧小平にはボル・ポトというカードを捨ててシアヌーク・カードをしようという意図が多量なりともありました。ベトナム側もシアヌーク・カードには用意があつたのですから、この歩み寄りには可能性があつたはずですよ。

### 鄧小平の本心

中嶋 鄧小平一派がこの「制裁」に反対だつたのならば、今の推測は納得できるのですが、中国の対ベトナム行動は明らかに鄧小平の指導で決定されたものです。ワシントンでも東京でも、鄧自身ははっきりと「制裁」を言明していますし、中国軍も鄧小平によつ

クロード・カダール、程映湘夫妻  
について

カダール夫妻との最初の出会い以来、もうかれこれ十数年が過ぎた。このユーモアあふれる風変わりなオシドリ中国研究家とは、あるときはパリで、あるときは香港で、また東京でと夜を徹して議論したり、意見の一致を喜び合つたりしてきたが、今回は二度目の来日で、久しぶりが共通の関心について語り合うことができた。いつしか五十路に達したお二人だが、相変らずの若々しきで、今回もまた私のゼミの学生たちの人気者になった。

文化大革命以来、マオイストが羽振りをきかせていたフランスの知的社会にあつて、お二人はきわめてユニークな存在であつたが、林彪異変から天安門事件、「四人組」追放までを分析した共著『毛沢東の二つの死』（一九七六年）は、フランスでも大いに注目された。クロード・カダール氏には、ほかに『新しい官僚独裁』、『中国を冷めた眼で見る』の著書があり、程映湘さんには中国、キューバのソ連の關係を分析した『中国キューバの蜜月、中ソの不和』がある。お二人は現在ともにフランス国立政治科学財団国際研究調査センターに所属している。

(中嶋嶺雄)

て統轄されている。では鄧がなぜそのような決定をしたか。私は中国をめぐる国際環境が

文化大革命の否定とベトナム侵略によって  
『中国への幻想』はいまや崩壊しつつある

程 チエン

映 イン

湘 シアン

(フランス国立政治科学財団  
国際研究調査センター)



行くのではないか、というのが、中越戦争前  
までの私の推測でした。

毛沢東の死以後の中国の民主化過程でも  
とも重要なものは「四・五運動」だと思いま  
す。鄧小平の第二の「革命」はこのブレッシ  
ャーの下ではじめてなし得た。この運動がな  
かったなら鄧小平は華国鋒、汪東興の力を排  
除することはできなかっただろうし、彼らを  
支持する中堅官僚の力を抑えることもできな  
かったでしょう。

一九六八年のチエコスロバキアや一九五六  
年のハンガリーで起った同様の民主化プロセ  
スは、ソ連の軍事的圧力によって潰されてし  
まった。この点からすれば、この中越戦争もソ  
連によって挑発された「中国民主化潰し」と言  
えるかもしれない。しかし、侵略の決断が鄧  
小平によってなされたのはまあ、確実です。か  
ら、そこで最初の問題——なぜ鄧小平はこの  
ような決定をしたのか——に戻ってしまう。

中嶋 たしかに中国のベトナム侵略につい  
ては、より詳細に検討する必要があると思ひ  
ます。そもそも鄧以後の中国がなぜボル・ポ  
ト体制を支持したのか。鄧小平自身の理論か  
らすればボル・ポト支持の姿勢は矛盾に他な

大きな影響を及ぼすことになると思います。

毛沢東派によって失脚させられた人々の名譽  
回復の動き、北京の壁新聞に見られるような、  
以前に比べれば自由な表現を一般の人々が認  
めるようになってきた——そういうプロセス  
です。もちろん、今のところ名譽回復といっ  
ても不完全なものに留まっている。「四・五  
運動」(天安門事件)という、当時最大の弾  
圧には手をつけていないからです。それと  
いうのもこれに手をつけると、現在の最高指  
導者たちが巻きこまれるからでしょう。

しかしながら、このような民主化のプロセ  
スは中国人を勇気づけるものでした。中越戦  
争はこの民主化をまた害うことになると思ひ  
ます。

カダール 彼女が挙げた民主化の過程に、  
私たちは深い関心を持っています。ソ連でこ  
れに対応する過程が、スターリンの死以後の  
変化ですが、私の考えではそれは中途半端に  
終わってしまった——あるいは遅々として進ま  
ずというべきでしょうか。最近の中国に芽生  
えた民主化の動きはソ連のそれよりもうまく

大きく影響していると思います。

過去数年の間、中国はアジア地域または広く第三世界と呼ばれている地域で、いくつかの重大な失敗を犯しました。たしかにワシントン、東京との接近によって威信を高めたことは事実ですが、しかし、中国外交政策の主要な局面は第三世界、とくにインドシナ半島さらにASEAN諸国にあるのです。そこに中国の深刻なジレンマが生じ、そのことがワシントンや東京を用心深くもさせた。この点で鄧小平は絶望的な状況の中で明らかに苛立っていました。

カダール その点に關しては、日本や西欧諸国がこの問題についてとった態度も考慮に入れなければならないと思います。鄧小平がワシントンと東京でベトナム制裁の意図を明らかにしたとき——東京の反応は、私は日本にいなかつたから分らないけれども——カーターは、中国の制裁行動には明らかに不賛成であるにもかかわらず、強い言葉でそれを表明しなかつた。それは間違いでした。鄧小平はカーターがこのようにはつきりしない態度をとることを計算に入れていたのでしょうか。

鄧小平に書信号も赤信号も、どちらも出さ

ず、問題を成行きにまかせた。それによつて生ずる結果を、対ソ連政策に利用しようとしたのです。アジアにおける対ソ政策というよりもイラン問題にこれが利用できる、としたのではないか。アメリカはいまや国民こそつてイランとイランの石油を失ってしまうのではないか、という強迫観念に苛まれてい

ますから。アメリカは、もとはといえば、アメリカ自身がアジアに作り出した、現在の困難な事態にどう係われればよいのか、方策が立たないのだと思います。中国はアジアへの定着を求めている。アメリカがこれを保証することには益があると思うのですが。

程 アジアの国際環境は、確かに中国にとつて大きな意味を持っています。中国はアジアの近隣諸国に向けて、ベトナムの挑戦に反撃する姿勢を示す必要がありました。このことは東南アジアというコンテキストの中では大きな意味がある。ASEAN諸国はベトナムが拡張主義を掲げて自分たちの安全を脅かすのではないかと恐れている。より保守的な自分たちの体制が、ベトナムに刺激された革命的な勢力によつてゆさぶられることを心配していますから。

しかし、中国の威信回復の手段として、ベトナムへの干渉を正当化することはできません。中国はカンボジアではないんですから。もし中国がベトナムに干渉しなかつたら、ベトナムは苦境に陥つたことでしよう、その時点で侵略的なのはベトナムだったのですから。中国は放つておいたほうが、より容易に威信を回復できたはずです。

一方、中国のこのたびの侵略を次のように考察することができる。第一にこれはベトナムの軍事的テスト、ベトナムのインドシナ半島における革命勢力としてのイメージを寄うテスト、またはソ連とベトナムの連帯をはかるテストである。第二にソ連がこのチャレンジに対して、どの程度対処する用意ができているかをはかるテスト……。

中嶋 ベトナムがカンボジアに侵攻したとき、中国は言葉によるサポート以外に、実質的行動はなにもとれませんでした。中国はベトナムを、制裁すると言明した以上、中国が今回も軍事行動を行うことができなかつたら、それはそれで中国の威信は決定的に下つたと思いますね。

威信の問題はひとまず措くとして、私が指

摘したのは、この軍事行動が昨年十二月の中国共産党三中全会の直後に起きたということなんです。この時期は政治的に極めて重要な時期で、結果として鄧小平といわゆる復活幹部が重要な地位を占め、華国鋒グループの影は薄くなってきた。もちろんこの時期の政治的妥協について私は、中国の政治的・社会的矛盾を重く見ているのですが。

カダール 中国のベトナム侵略行動は、中国トップ指導者たちの対ソ強迫観念に関連すると思います。この対ソ感情が文革後の体制の失敗を招いた。中国指導者たちは無意識のうち国内政策のスケープ・ゴートを必要とし、自分たちの外敵を過大に表現する方向に進んだ。かつてのソ連にもベトナムにも同じような現象が見られるように思います。これが官僚国家における官僚の、一種の行動原理ですね。奇妙なことに官僚国家同士は、資本主義国家同士よりもお互いの関係が攻撃的なのです。

中嶋 その通りですね。今のカダールさんの指摘につけ加えますと、中国にはその意図とインドシナ半島の現実の状況との間に重大な情報ギャップがあります。情報収集が欠け

ている。これは官僚体制が持つもう一つの大きなジレンマでしょう。

中国がベトナムに固執して泥沼に陥るのは極めて危険です。ソ連がこれに捲き込まれるからですが、ベトナム問題にソビエトが介入する可能性についてはどうお考えですか。

カダール ソ連がこんな素晴らしい介入のチャンスを利用しないはずがない(笑)。彼らにとってインドシナ半島に関する米・中・日はドミノの駒のようなものです。ソ連のベトナムへの関心の背後には、海底油田を持つ西沙群島の存在がある。鄧小平もソ連がこの島々を支配下に収める可能性をカーターに説いて注意を促したようですね。

### 兵営国家

中嶋 昨年十一月に結ばれたソ越友好協力条約は、昨年夏の日中平和友好条約の、最初の重要なリバーカッション(はねかえり)の一つだと思います。ベトナム側から見ればこの条約によって、カンボジア侵入に際してソ連の軍事力を背景にすることができた。これが中国側にとっては大きな脅威であるわけです。日中平和友好条約を結ぶにあたって、中

国は今年四月で期限のくる中ソ友好同盟条約を破棄することを明らかにした。中国が果たして日本との約束どおり中ソ友好同盟条約を廃棄するかどうか、情勢が緊張してきただけに大いに注目しなければなりません。ソ連にとってこの条約破棄は中国側の最後通牒を意味するわけですから、その後は、ソ連の中国への軍事的攻撃は容易に行われることになる。まさに現在、アジア情勢は重大な局面を迎えているのです。

程 事態は確かに深刻ですが、ソ連がただちに中国を軍事的に攻撃するとは思えません。

第一に中国がアメリカと国交を正常化し、日本とは条約を結んだ結果、ソ連は日米という二つのパシフィック・パワーに直面することになった。日米が自分にシンパシーを抱くとは、ソ連は考えてもいないでしょう。第二にもソ連が中国を攻撃すれば、ベトナム侵略が中国を追いやった、まさに同じ窮地に自らを追い込むことになる。それは同時にソ連国内の少数民族の独立要求を高めることになり、そのようなリスクをソ連がおかすことはいらないと思う。

才情溢れる傑作にシンドローム

中絶 本を日暮るにもと平和愛国臣

私たちは、中越戦争を、あなたが最近の著書でお書きになっている中ソ対立の危機の体系の最たるものである、と考えている。資本主義世界にも共産主義世界にも全般的な危機というものは存在する。社会主義世界におけるそれは官僚制度だと思えます。ソ連、中国、ベトナムといった国々は社会主義国というより官僚國家であり、私たちにあって官僚とは階級です。論理的な婦結として、官僚諸國が互いの間に平和を保つことはできない。なぜなら、彼らは国内政策の基礎的發展の必要に充分に対処できないからです。

そのような誤算はしないでしよう。歴史的に見て、戦争が最善の解決策であったような複雑な状況が確かに存在しました。現在の複雑な状況を戦争に持ちこませない第一の希望は、米ソの軍事バランスが維持されることであり、第二の希望は核時代に生きていくという認識が米ソに強くある、ということですが、口で言っているより実際は分ってくれていることを願いますね。こういった希望を抱きつつ、私は鄧小平が、シアヌークという人物を個人としてよりも象徴として評価し、彼をカードとしてベトナム指導者との妥協の道を探してほしいと思う。楽観的な見方だとは思いますが……。

ところでフランスはインドシナ半島、とくにベトナムとは歴史的に深い係わりを持っていますが、フランスの学者として、ベトナムの現実、インドシナ半島の現実、そして中越戦争という事態をどう思われますか。

カダール フランスの学者を代表するわけにはいきませんが、私が属しているグループの考え方を話しましょう。私たちのグループは長らくフランス内の少数派でしたが、今ではやや大きくなっています。

山と溪谷社の本

写真集  
子ねこ

本多信男

オールカラー／略装丁／ビニールカバー付

●定価一、〇〇〇円

●写真家・本多信男氏の家に住みついたノラの子供たちが、わが家を所せましと遊びまわり、どこでも眠りこける無邪気な姿を、同居人？の本多信男氏がレンズでとらえた傑作写真集です。

好評の既刊5冊！

- 猫(色ラビア大版) ●1200円
- 山溪フォトライブラリー
- ねこ ●1200円
- 日本ねこ ●1400円
- きままな日本猫 ●1500円
- 山溪カラーガイド
- カラー猫の本 ●1200円

山と溪谷社  
東京都港区芝大門1-1-33 電話03  
-436-4021 / 振替 東京8-60249

までは多くのフランスのインテリと同様、ソビエトこそ真の社会主義の体現だと信じていましたから。そのショックの回復には長い時間がかかりました。かつて私たちがチェコスロバキアやハンガリーに望んで果たされなかったことを中国にも望みたい。単なる官僚国家の段階から社会主義的民主国家へと移行してほしい。

中嶋 官僚国家という言葉を使っていらっしやいますが、少なくとも現在の社会主義国家は、東欧の一部諸国を除いて、いわゆる「兵営国家」になっていますね。

カダール どういう意味ですか。

中嶋 軍事的独裁への傾向をより強く持っている。

カダール 毛沢東死後の中国に芽生えたのは、いわゆる「兵営国家」でなくなろうとする傾向でしよう。これが続くともいのですが。

### 打ちこわされた幻想

中嶋 ところで藤村信さんという人が、最近の中国にかんするフランス人の見解を紹介する論文を『世界』の昨年十月号に書いて

現在のフランスにおける秀れたノン・マオイスト・グループの研究者として紹介されています。フランスの若者や左翼はソ連の官僚体制への失望から毛思想の「造反有理」に大いに鼓舞されたようですが、まったく同じ状況が日本にもありました。カダールさんは、中国のベトナム侵略が、フランスにおけるこの種の中国への幻想を最終的に打ちこわすことになると思いますか。

カダール そうなるだろう、と思います。フランスとベトナムの関係は特殊なものですから、フランス人はベトナムに対して体制を離れてシンパシーを持っている。ですからフランスがベトナムで戦ったインドシナ戦争の時代、大多数の国民はこの戦争を感情的に許容していませんでした。その後アメリカが介入したベトナム戦争では、ベトナムに対する同情が最後まで存在しました。この点で今回の中越戦争でフランス人が一般に感じた中国への失望は、イデオロギーに基づくものというよりもベトナムに抱きつづけてきた国民的親近感による、センシメンタルなものだったと思いますね。そういった意味で中国のベト

制への警戒は別としてロシアという国家へのシンパシーを持つという傾向もフランスにはあるのです。

中国に抱いた幻想についていえば、もう二年ほど前、「四人組」の没落以来こわれっ放しです。文化大革命への幻想は最後の最後、毛沢東の死まで続き、私たちが単なる事件ではなく重要な意味を持つと考えた「四・五運動」を他ならぬ中国自身が抑圧し、告発したときにまったく崩れました。

中嶋 中国のベトナム侵略は彼らの幻想への最後のな、決定的なアタックですか。

カダール そう思います。

程 私たちが三年前に『毛沢東の二つの死』を出版して「四・五運動」こそ新しい中国革命の始まりであったのに、中国の指導者がこれを反革命として弾圧した——と述べたときは、これに対してフランスで猛烈な抵抗がありました。毛の影響を受けたインテリにとっては受入れ難い見解だったようです。

変化は突然ではなく、徐々にやってきました。去年の秋になって、毛沢東の革命を最も熱烈に支持し、擁護していたフランスの新聞『レギルシオン』が、はじめて北京で「何か、

まわっていると報道しました。

カダール この新聞は外国にはあまり知られていませんが、五月革命の継承者として重要な新聞です。五月革命に関係した人々は、その後ずっと毛沢東の政策にシンパシーを寄せてきましたが、今や、やっとその反対になりつつある。

程 この新聞が発刊されるときは、サルトルが後援しました。

中嶋 サルトルとボーヴォワールは戦後の日本のインテリに大きな影響を与えてきましたが最近ではその影響力はまったく薄らいできています。サルトルの中国へのシンパシーは天安門事件で最後のに転換したのですか。

カダール それについては長い長い解説が必要ですが。私たちが極めて頑固な、毛沢東の最後の擁護者と呼んでいる純マオイストの人々、『ソ連における階級闘争』という本を書いた経済学者のシャルル・ベトレイムやおそらく日本でも名を知られている中国現代史のジャン・シェノー、『ル・モンド』北京特派員のアラン・ジャコールなどは、文革の失敗を心から遺憾に思っている。ジャン・シェノー

体制だと書いています。『ル・モンド』の北京特派員は、フランスの中国問題に重要な影響を与える地位にあります。彼の記事は悪くない。極めて正直に事実を報道してくれる。彼は率直に中国の革命はもう終りだ、失敗だ、それが残念だという。私たちはこういう人々に好感を持ちます。

中嶋 日本にも、「中国はダメになった」、「中国は墮落している」ということをいう元マオイストがいます。私も彼らにはむしろ好感をもちますが(笑)。サルトルは、そういうフランスの純マオイストとはちがうのですか。

カダール サルトルは別です。現在の彼の態度を論評する気は起らない。サルトルはもう年もとつたし、身体の具合も良くない。しかし、彼の過去の言動は確かに興味あるテーマですね。彼が一九六八年の五月革命以前にマオイズムの成功を予言していたことは事実です。フランスにおけるマオイズムの成功への確信と五月革命は直接に結びついていた。五月革命当時と林彪の没落後との間でサルトルの態度の変化は興味深い。つまり彼は他人より早い、というかより感覚が鋭いとい

うのでしょうか。五月革命の挫折の後、彼は五月革命で失墜した權威をとり戻すために、マオイスト・グループに入り、彼らの旗を振るようになった。そしてこのことには成功しました。しかし、一九七五年以降、彼はただの老人です。「四人組」没落の直前には、毛の中国は自分が前から考えていた中国ではない、という見解を述べています。いずれにしてもサルトルの軌跡はここで十分に語り尽くすことはできませんがね。

中嶋 日本で良く知られているフランスとイタリアの映画監督ジャン・リュック・ゴダールとミケランジェロ・アントニオーニが、それぞれ中国に関する映画を撮りましたね。日本でも評判になりましたが。

程 ゴダールの『中国人』は、バリの豊かな階層、そこで革命に美しい夢を抱く若者たちの持つイメージ、血でさえ美しいという文化大革命のイメージを描いていると思います。つまり、現実にかけていることは関係ない、一種のユートピアを描いている。ブルジョアに反逆して五月革命に参加した青年たち、中国に起ったことに熱意を持ちながら、真実を知らされなかった青年たちの社会的感情をこ

の作品に投影した。ゴダールはダンディーですが、中国人である私からいわせれば白昼夢ですね。しかし、ゴダールの作品もフランスのマオイストのあいだではホイコットされました。アントニオニーの作品はより現実的で、芸術的観点からも満足のものでした。

中嶋 日本人のなかの富裕な階層のインテリや青年たちも、しばしば革命という幻想に心を魅かれます。

程 けれども、彼らの手はいつも汚れませぬ。

カダール かつてブームに乗ってフランスのマス・メディアを支配していたマオイストたちの反応は現在いくつかのグループに分類されると思います。まず第一に、中国の最近の民主化プロセスを認めない、つまり「四人組」追放を否定する人たち。二番目は自己批判を行ったタイプ。ジャン・プロワイユがただ一人これに当る。彼の本は「四人組」没落の前に書かれ、たまたまこの事件の後に出版されたのです。

第三の反応は「テル・ケル」誌の編集者だったフィリップ・ソレルスら。その中でアン

が、彼らはマオイストだったにもかかわらず自己批判はしない。一挙に全体主義に反対するという新しい潮流に身を投じたのです。彼らは新哲学派と称されている。四番目が中国のことは耳にするだにおぞましい、何一つ聞きたくもない、という反応で、これは特に

かつて毛沢東に関する本を沢山出して、おおいに儲けた出版関係者に見られる(笑)。

過去二十年間、フランスで影響力を持つインテリは左翼だったと思います。しかし、中国では実際に社会主義革命が行われたが、フランスは共産党はおろか、社会主義政党ですら、政権をとることを好まなかった。過去十年間、多種多様な人々がフランスにおけるマ

オイズムの風靡に貢献しました。彼らのオビニオンは「ル・モンド」、「ヌーベル・オブセルバトゥール」、「レ・タン・モデルヌ」などのマス・メディアを席捲しました。林彪の没落までのことですけれども……。

程 いろいろなマオイズム・グループがあったのです。なぜ、どのようにしてこれらがあったか。歴史的にも、個別的にも分類して検討して見る必要があると思いますね。

し、日本でも状況は大きく変りました。

ところで、フランスの保守派の中国観についておうかがいしたいのですが、日本でも翻訳されたド・ゴール派の政治家アラン・ペールフィットの訪中記「中国が目覚めるとき世界は震撼する」は、フランスでもベスト・セラーだったそうですね。

カダール ベールフィットの本は、悪くはないが、彼はなにしろ野心的な政治家でテレビ界にも君臨して中国ブームをつくりましたからね。

中嶋 もう一人、亡くなったアンドレ・マルローについて伺わせて下さい。マルローは中国について多くの作品を書き、晩年政治家としてド・ゴールにも協力しましたが、ド・ゴールの中国政策に貢献したと思いますか。

カダール そうは思いません。影響を与えなかったとは言えませんが、ド・ゴールは彼自身の構想を持っていた。中国の承認は、米ソ二大国を向うにまわして、この国と同盟を結ぶという目標の下になされた。そしてアメリカのベトナム侵攻に際しての中国の態度や、文化大革命の中国に失望して中国との同盟を諦め、アメリカと対抗するためにソ連との同

## たばこサイズになった ポケットテレコ

突然あらわれたごらんテレコ、たばこサイズのボディで2時間録音が可。サイレントオフもできれば、後追い録音もできます。小さくなくても、メカニズムは今まで以上というわけ。これも、ポケットテレコの先駆者かなせるわざです。記録・報告・学習・情報収集に。1台あれば、男が坊がります。



¥29,800

OLYMPUS OPTICAL CO., LTD.

オリンパス

パールコード  
S701

生テープMC 60'イヤホンE 85'プラグアダプター  
PA1'ハンドストラップST1'単3乾電池2本付。

カタログのご請求は、資料に氏名・年令・住所・電話・職業・  
テレコの有無をお書きの上下記宛へお申込みください。  
オリンパス光学工業㈱・宣伝部 G. S701係  
〒151 東京都渋谷区神宮前2-43の2 TEL. 03(37)21110

中嶋 あれは一九七〇年秋だったか、香港で私たちが討論しているその席上に、シャルル・ド・ゴールの死の知らせがありましたね。われわれのほかに中国人の友人が一緒でした。ド・ゴールの死というニュースから、われわれの会話は毛沢東とド・ゴールのどちらが政治家としてより偉大であるか、という話になった。その中国人の友人は毛沢東主義はいやだけれども、毛自身は偉大な政治家だといいはじめた。あなたは毛もド・ゴールも

ができたのに、それをしなかった点です。九五八年と六七年の二度、独裁権を持つことができたのに、それをしなかった点です。旗幟不鮮明だった。当時の左翼人の多くは、彼が新しいフランス・ファシズムの触媒になるのではないかと考えた。でも、それは間違っていました。彼のきわだったところは、一九五八年に戻ってきたときの彼は

程 わたしは自分がナショナリストでもなければインタナショナルリストでもないと思っています。国民という言葉は好きではない。国民は国家と不可分で、国家という装置はいつも私を困惑させるからです。で、私は自身をある歴史的期間のなかの、民衆の一人と見なしたい。

多くの人は、毛を中国解放のシンボルとして偉大だと言う。ある程度まで賛成します。しかし、一人の人間が全人民の解放のシンボルになり得るでしょうか。一九四〇年のド・ゴールは解放のシンボルだった、といま言われたけれども、中国でもフランスでも、歴史的には解放は多くの人々によってなされ、その過程で多くが英雄的に死んでいる。従って私にとっては、シンボルは一人の人間ではな

## 華国鋒とベリヤ

即ち考えるようになった。彼は多くのフランス人同様、中国文化の偉大さに魅了されたものの、新しい中国という現実を無視するといふ、愚かな政策をとってしまった。

私にとって興味深い論争でした。カダール 私は一九四九年から五五年までの毛と、五五年から六六年までの毛を区別して考えます。前期の毛が成功した基盤を、後期

の毛は自分で打ちこわしている。ド・ゴールについては、一九四〇年六月十八日以後のド・ゴールはフランス解放の偉大な人物でした。一九五八年に戻ってきたときの彼は

くグループなのです。

中国では、共産党が人民を解放し、新しい中国を建設するボディとなった。そして毛と彼の同僚たちは、まさしく彼らが達成しようとしたことを破壊した。その指摘には賛成ですが、もし、毛がこの破壊に成功したのなら、彼を助けた人々がいたからそれが出来たのです。同じような状況下ではないけれども、ド・ゴールはチャンスをつぶしたと思います。彼はある特定の時期に、ある種の階級の利益に自分を同一化させた。つまり彼は成長中の保守的ブルジョワ政治グループと提携して、広範な支持のエネルギーをフランスの再建に結集することができなかつた。だから彼は失敗したのです。

中嶋 ところで「四人組」の没落後、私は華国鋒とベリアとの比較を考えたのですよ。

カダール 私たちも同じです。それについて論文を書いてみたのですけれども。

中嶋 日本では、この両者を比べる学者はあまりいないようです。

程 興味深いテーマだと思いますがね。

中嶋 さて、中国の政治的未來についてど

カダール 難しいな。今はまだベトナムと戦争中ですからね。

程 私についていえば、あまり客観的にならないのです。私は中国人ですから、中国の变化の全過程に深くかかわっている、という感じなのです。多くの中国人と同じように急進的な民主化プロセスを熱望したものですから、あまりに楽観的であると、フランスでもしばしば批判されました。

過去数カ月の間、私は中国人の精神のなかに、新しい国家目標に参加しようという気運が生れたように感じていた。この気運は単に指導層のレベルだけではなく、グラス・ルーツ・レベルにまで浸透した広く深い流れだと思

う。もちろん内政の混乱もある。官僚政治の

腐敗もある。ソ連にも見られなかつたような弾圧もあるでしょう。にもかかわらずこの気運を作りあげていくために、今必要なのは知的な理解力なのです。それが果して得られるかどうか、そこが希望を抱きつつ、心配なところなんです。鄧小平のような用心深く、独自の判断力を持つリーダーが、ベトナム侵攻に責任を持つようになるとは夢にも思わな

も何か誤算したに違いない。中国の現代化、民主化へのプログラムを、鄧は誠実に信じているに違いないからです。この戦争を早く終らせなければ、このプログラムは害われます。私はそれが心配です。

カダール 私はスターリンの死後に、マルクシズムがソビエト共産党の中で勝利をおさめたことに大きな希望を抱いたグループの一人です。しかし、その後起つたことには失望しました。その当然の帰結としてハンガリー革命、キューバ革命、中国革命に希望をつないだ。しかし中国革命に希望をつないだことに関しては、五月革命のときに人々が犯したのと同じ間違いを犯したと思います。

ベトナム干渉までの中国は、官僚主義を打破して、社会民主主義を打ちたてるための四回目か五回目の爆発のプロセスだ、と思つていました。「四・五運動」はその現れだった。

鄧小平はそのことを確信していたに違いないと思います。一九六六年から七六年に至る十年間に中国が果して何を発見し得たのか、それを充分に考えてみるのが大事でしょう。

権力の行使と官僚主義が今後の挑戦の対象になる、と思われれます。

を抱いていた人々の幻想も、おのずから急速に消えつつあるのではないか。

飛鳥田氏も悪い時に委員長になったものだ。

(愛媛県 無職 高橋敦一)

### 社会党の今後のために

4月号の内藤国夫氏による飛鳥田社会党委員長へのインタビューを、12年来の同党支持者である私は興味深く読んだ。

人間・飛鳥田の魅力が充分に感じられたが、一方党首としての迫力に欠けるのも確かなようだ。

先日急逝された成田前委員長もタイプは違うとはいえ、やはりそうだった。しかし私は成田さんに体现されるような社会党の、誠実で知性的なんだけれど、どうにも不器用だという性格が大好きである。

これからは、保革伯仲時代でもあり、より現実的に政権担当

能力が問われてくるだろうし、具体的な政策立案、政権獲得に至るプロセスの明確化など課題は沢山あるが、この性格はやっぱり失ってほしくないような気がする。

ところで社会党の抱えている問題の一つに協会派の存在がある。田原総一朗氏の話だが、反原発を打ち出した社会党のあるエライさんが「でもソ連の原発は安全でしょう？」と習ったそう。以前、アメリカの核兵器と社会主義国のそれとは違うという議論があったが、未だにこういう硬直した考えの人がいるのは困る。

しかし足腰の弱い社会党にあって、地道に日常活動を続けてきたことも評価されなければならぬ。とすると、協会の問題をどう解決するかがそのまま社会党の体質改善につながるのではないだろうか。

(京都市 学生 富川泰雄)

## 編集後記

★統一地方選挙の運動いまだ耐。注目の東京都知事選では有力三候補が三様の個性を売出し中。独自の政策をもって争うには至っていないのが残念ですが。

★この機会に巨大大都市・東京に焦点をあわせて特集を試みました。巻頭は巨大化の果てに機能麻痺に陥った東京を改造するための具体的な方策を、きわめて詳細に提案したものです。この構想について各方面から大いに議論が起ることを望みたいものです。

★農業問題と都市問題を一つの視野に納めてユニークな鼎談、情報都市としても世界化したトウキョウの一面を指摘する渡部昇一氏に加えて、斎藤精一郎氏の中堅官僚論、今回の植田康夫氏「書評クニック」も、大都市の問題に別の角度から光をあてています。

★江藤淳氏の文章は、敗戦

直後の新聞の小さな記事で筆者とともに特説する中から、隠されていた大きな構図が浮び上ってくる過程が読む者の興奮を誘います。

★新聞・雑誌に氾濫する「イラン」中越情報とは一味違った市川紀夫氏の報告、中嶋嶺雄氏を中心とする座談会はいかがでしたか？

★終始、大岡信氏に心労をおかけした「草木虫魚」が四季十二カ月をカバーして終わりました。編集する者にとっても楽しい頁でした。大岡氏に御礼を申し上げます。

★書店で小誌をお求めになりにくい方に、年間予約購読をおすすめします。小社営業部サービス課宛に、郵便番号、住所、氏名を明記の上、お問い合わせて下さい。

★読者の投稿をお待ちします。小誌掲載論文への意見、編集者への注文等、なんでも結構です。四百字詰原稿用紙一枚半程度、毎月十五日までにお送り下さい。掲載分には記念品を差し上げます。

購読 / 昭和54年5月号 480円 昭和54年5月1日発行  
編集兼発行人 竹内修司 印刷所 凸版印刷株式会社  
発行所 株式会社文藝春秋 東京都千代田区紀尾井町3 電話265-1211 (代)  
振替口座 東京7-78743番 郵便番号102 \*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。